



学園花の村機関紙第 7号

2014年2月3日(月)
編集兼発行人 松井道夫
掛川市掛川1065

TEL (0537) 24-0101
FAX 24-0242
E-MAIL mm317@tokai.or.jp

清貧の極致は推譲—アメリカ農業の大黒柱—

津野幸人

作者名は忘却したが次の句は、確か死刑囚である人の詠んだ句と記憶する。

“夜の蠅追えば独房広すぎる”

小さなハエではあるがその存在は作者の等身大にまで及び、生命へのいとほしみと、謙虚な心境が伝わる。人は、簡素な生活に身をおき、死を見つめ続けることによって、かくも感動を呼ぶ心境に達することができるのである。

1983年から10年余りのバブル経済はまさにマネーゲームの時代であったが、その熱気に水を注したのが中野孝次の著書「清貧の思想」(1992)であった。著者は、物や金への執着が強いほど精神面の豊かさを失う。だから、できるだけ生活は切り詰めて簡素なものとし、心の豊かさを求めよ、と呼びかけた。その例証として、古典の詩歌や西行、兼好、芭蕉、良寛などのエピソードを引きながら論を展開したのである。この本は大きな反響を呼び起こしたが、一

面では「貧乏礼賛」との批判もあった。

私は、「清貧」とは物を大切にす生活、つまり“もったいない”という心を貫くことであって、世界共通の伝統的な農村文化だと心得ている。しかし、これは「強制された簡素生活」、つまり貧困の産物であることも否定できない。清貧とはあくまでも自発的な選択であるべきだ。

俗世を捨てて自ら清貧の生活を選ぶのが出家である。が、率直に言って彼らの生活は、生産者への寄生によって保たれている。江戸期の風流人や茶人の営む簡素生活は、たしかに清貧のモデルあり高雅な文化といえようが、それらは経済力による生活の保障があつてこそ実現できるのだ。

人間の本質的な存在は、ホモ・ファアベル(物を作る人)である。文明も文化もこの本質から生まれる。そして、文化を育むのは都市だけではなくて、農村という広大な地平がある。ホモ・ファアベルの立場を貫きながら、如何にして自発的な清貧に至るか、この大問題への回答はすでに二宮尊徳が示している(拙著『小さい農業』

〈農文協〉・p121~134)。

それは「分度」の設定という欲望の自己規制と余分の財は社会に還元するという「推譲」の実践だ。至難の業と思われるかも知れぬが、アメリカ農業を支える清教徒農民はやっている。

文人であつたアメリカ第三大統領ジェファソンは、著書(ヴァージニア覚書)で述べている。「もし神が選民を持つとすれば、大地に働くこそ神の選民であつて神はこれらの人々の胸を根源的で純粹な徳のための特別な寄託所として選んだのである。・耕作者の大部分が道徳的に腐敗するといった現象は、いまだかつてどの時代にも、またどの国民にも実例のあつたためしがない」この言葉は、今でもアメリカ農業を支える清教徒農民の心を的確に表現している。

彼らは禁酒、禁煙で勤儉をモットーとして農業に励む。そして年収の約一割を献金推譲している。私が長期滞在したアーカンソウ州の裕福な農家は、朝食抜きの日二食であつた。献金の額を増やすために働いているようにみえた。

わが国農村の識者は、口を開けば補助金の増額を願う。発想の動機に大きな温度差を感じる。日本の農協は「報得」団体であつて、得(補助金)に票で報いる集票組織で、およそ「報徳」とはかけ離れた存在だ。キリスト者の先覚・内村鑑三は、二宮尊徳には清教徒の血が流れていると評している(『代表的日本人』・岩波文庫)。